「キャンプ指導者入門」 資料　理論編　第1章

資料番号	資料名	掲載ページ	資料ページ
理 01-01	いろいろなキャンプ　各キャンプの特徴と留意点	4	2
理 01-02	青少年の自然体験等に関する実態調査	10	3～6
理 01-03	キャンプのルールとマナー	19	7～9
理 01-04	環境教育とキャンプ	24	10～13

各キャンプの特徴と留意点

キャンプの種類	対象（キャンパー）の特徴	指導の留意点
幼児キャンプ	・体験が不足している ・保護者と離れた体験が少ない ・好奇心，冒険心が旺盛	・幼児の興味，好奇心，探求心をくすぐるようなプログラム。 ・幼児の体力，集中力などの身体的，精神的発達に応じたプログラムと安全管理。 ・基本的生活習慣など個人差が大きいので，行動を焦らせない。 ・安全配慮しながら，できるだけ自分でできるように。
青少年キャンプ	・体験が不足している ・コミュニケーション能力の低下 ・好奇心，冒険心が旺盛 ・身体的，精神的発達が大きい	・自分と他者とのコミュニケーションを促進する。 ・個人の挑戦心，冒険心をくすぐるようなプログラム。 ・個人の興味に応じた選択プログラムを用意する。 ・安全配慮しながら，できるだけ自分でできるように。
高齢者キャンプ	・健康状態に不安 ・経験が豊富である ・自分の好みがはっきりしている	・事前の健康調査及びキャンプ中の健康管理に注意する。医師や看護士の常駐，医療機関の把握，救急体制を十分取ること。 ・個人の興味に応じたプログラム，とくに選択プログラム，自主的に参加可能なプログラムを十分用意する。 ・本人の自主的な行動が重要であるが，自分勝手な行動を取ってしまうケースもあるので注意する。
ディキャンプ	・リピーター（過去の経験者）が多い ・活動への興味，関心が高い （活動が決まっていることが多いので）	・シリーズとしての流れ，目的を大切にした計画 ・1回として十分楽しめる内容，活動への満足感を持たせる ・既知の仲間と初参加者とのコミュニケーションに配慮する
短期キャンプ	・キャンプへの参加意識が高い ・キャンプへの期待が高い ・狭い年齢構成	・いろいろな活動を詰め込みすぎない ・野外炊事活動と本部からの食事の提供，食堂の利用を効果的に。 ・単なる体験しただけ，楽しんだだけに終わらない学習効果を高める工夫
長期キャンプ	・キャンプの興味関心が二極化 （非常に高いか低い） ・キャンプへの期待が高い ・幅広い年齢構成	・ねらいを達成するためのプログラムの流れを考える ・臨機応変な対応可能な設定 ・参加者の本心が現れ，参加者同士で問題解決できる支援
療育キャンプ	・からだやこころに障害を抱えている ・日毎で心身の変化を見せることもある	・キャンプカウンセラーの専門的知識が大切 ・指導者が多くなるので，指導者間のコミュニケーションが大切 ・キャンプの効果を焦らずねばり強い支援
エコロジーキャンプ	・環境問題に意識が高い （参加目的がはっきりしている）	・キャンプ生活，活動のすべてにわかって一貫した方針で実施 ・指導者自身の行動，キャンプ場の理念などもねらいに統一していること
冒険キャンプ	・身体的，精神的に強い参加者が多い ・チャレンジ精神が旺盛	・参加者の身体とこころの安全への配慮 ・個人の挑戦とグループでの挑戦の融合（活動の難易度も大切な要素） ・ストレスと静養のバランス
ユニバーサルキャンプ	・参加者の年齢層，参加動機が幅広い ・参加者が可能な活動が幅広い	・事前の健康調査及びキャンプ中の健康管理に注意する。医師や看護士の常駐，医療機関の把握，救急体制を十分取ること。 ・個人の興味に応じたプログラム，とくに選択プログラム，自主的に参加可能なプログラムを十分用意する。 ・キャンプカウンセラーの専門的知識が大切 ・指導者が多くなるので，指導者間のコミュニケーションが大切
学校教育キャンプ	・学校教育の人間関係をひきずる ・参加意識は幅広い （全員強制的参加）	・学校における人間関係を引きずらない，あえて崩す工夫 ・学校からの指導依頼の場合，キャンプのねらいやキャンプに対する考え方等を十分に教員と打ち合わせる

青少年の自然体験活動等に関する実態調査

① 子ども調査編

1 自然体験活動をたくさんした子どもは、自然体験活動に対して肯定的なイメージ

自然体験活動をたくさん行った群ほど、中学・高校生とも自然体験活動に対して「開放的な」「楽しい」「すがすがしい」「すばらしい」「うれしい」といった肯定的なイメージをもっている者が多く、自然体験活動を行わなかった群ほど、自然体験活動に対して「疲れる」「面倒くさい」といった否定的なイメージをもっている者が多い。

―中学・高校生調査より

自然体験活動に対するイメージ	自然体験活動を	
	たくさん行った群	行わなかった群
開放的な	40%	24%
楽しい	67%	35%
すがすがしい	36%	18%
すばらしい	37%	17%
うれしい	23%	6%
疲れる	39%	50%
面倒くさい	14%	35%

※上記は中学生の数値のみ

2 自然体験活動をたくさんした子どもは、課題解決能力や豊かな人間性など、「生きる力」のある子ども

自然体験活動をたくさん行った群ほど、「わからないことは、そのままにしないで調べることが多い」、「誰とでも協力してグループ活動ができる」、「相手の立場になって考えることができる」などの項目に「当てはまる」と答えた者が多く、自然体験活動を行わなかった群ほど「当てはまらない」と答えた者が多い。

―小学生（4～6年）調査より

課題解決能力や豊かな人間性	自然体験活動を	
	たくさん行った群	行わなかった群
わからないことは、そのままにしないで調べることが多い	70%	53%
誰とでも協力してグループ活動ができる	78%	64%
相手の立場になって考えることができる	73%	56%

また中学・高校生では、自然体験活動をたくさん行った群ほど、「勉強で分からないことがあったとき、そのままにしないで調べること」、「友だちの悩みや相談を聞いてあげること」などに、「よくある」または「時々ある」と回答した者が多い。

―中学・高校生調査より

日常の生活・行動	自然体験活動を	
	たくさん行った群	行わなかった群
勉強でわからないことがあったとき、そのままにしないで調べること	61%	45%
友だちの悩みや相談を聞いてあげること	62%	52%

※上記は中学生の数値のみ

3 虫が気になるのは、自然体験活動の少ない子ども

自然体験活動を行わなかった群ほど、「ガ・クモ・アブなどの虫がいっぱいいること」「水洗トイレがないこと」「虫に刺されること」について「気になる」と回答した者が多い。

―小学生（4～6年）・中学・高校生調査より

キャンプに行くとしたら気になること	自然体験活動を	
	たくさん行った群	行わなかった群
ガ・クモ・アブなどの虫がいっぱいいること	45、44、37%（小・中・高）	54、61、59%（小・中・高）
水洗トイレがないこと	30、27、19%	36、40、34%
虫に刺されること	35、32、30%	40、44、40%

このデータは、全国の小中高校生約6万6千人という大規模な調査結果をまとめたもので、かなり信頼のおけるものです。どの調査項目を見てもたくさん行った子どもの方がプラスの評価となっており、自然体験の意義が明らかにされています。今後は、「なぜ自然体験は有効なのか」、「自然体験の何が良いのか」、というような踏み込んだ調査が期待されます。

データの中で私が気になったのは、たくさん自然体験を行っていても、そのイメージとして「楽しい」としている中学生が67%しかいないことです。「すばらしい」にいたってはたったの37%です。私にはこの数字がとても低く感じられました。「自然体験活動」という言葉が重い感じなのでしょうか、それとも「キャンプ」ならより楽しいイメージだったのでしょうか。どんな自然体験活動をしたのかがとても気になります。それは活動の「質」もとても大切だからです。また、自然体験の楽しさやすばらしさを引き出すために、「指導者」の存在も大きいものがあります。指導者付きの活動だけを対象にしていたら違った結果が得られたかもしれません。（多田聡）

4 自然体験活動をたくさんした子どもは、体力に自信

自然体験活動をたくさん行った群ほど、体力に自信があると答えた者が多く、逆に自然体験活動を行わなかった群ほど自信がないと答えた者が多い。

―中学・高校生調査より

体力に	自然体験活動を	
	たくさん行った群	行わなかった群
自信がある	20%	10%
自信がない	26%	35%

※上記は中学生の数値のみ

5 環境問題に関心があるのは、自然体験活動をたくさんした子ども

自然体験活動をたくさん行った群ほど、「地球の温暖化」、「オゾン層の破壊」「ゴミ問題」など気になる環境問題の数は多く、自然体験活動を行わなかった群ほど気になる環境問題の数は少ない。

―中学・高校生調査より

気になる環境問題	自然体験活動を	
	たくさん行った群	行わなかった群
8～9個	23%	12%
0～1個	11%	25%

※全9項目から気になる環境問題を選択した ※上記は中学生の数値のみ

6 自然体験活動をたくさんした子どもは、得意な教科の数が多い

自然体験活動をたくさん行った群ほど「理科」「図画工作」「体育」が得意であると回答した者が多く、得意な教科の数も多い。

―小学生（4～6年）調査より

得意な教科	自然体験活動を	
	たくさん行った群	行わなかった群
5教科以上	26%	10%
1教科以上	14%	29%

※全8教科から得意な教科を選択した

7 自然体験活動をたくさんした子どもは、ボランティア活動も豊富

自然体験活動をたくさん行った群ほど、ボランティア活動もたくさん行っている者が多く、自然体験活動を行わなかった群ほどボランティア活動もしていない。

―小学生（4～6年）・中学・高校生調査より

ボランティア活動	自然体験活動を	
	たくさん行った群	行わなかった群
地域のお祭や行事に協力	70、64、63%（小・中・高）	36、32、25%（小・中・高）
地域の清掃活動に参加	59、40、28%	24、9、3%

独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター実施の調査（2004.8）より引用

青少年の自然体験活動等に関する実態調査

② 保護者調査編

8 自然体験活動をたくさんした子どもの親は自然体験活動に対して肯定的なイメージ

子どもが自然体験活動をたくさん行った群ほど、自然体験活動に対して「開放的な」、「楽しい」、「すがすがしい」、「躍動的な」、「うれしい」といった肯定的なイメージをもっている保護者が多く、自然体験活動を行わなかった群ほど、「難しい」、「面倒くさい」といった否定的なイメージをもっている保護者が多い。

自然体験活動に対するイメージ	子どもが自然体験活動を	
	たくさん行った群	行わなかった群
開放的な	65%	56%
楽しい	81%	65%
すがすがしい	38%	24%
すばらしい	45%	26%
躍動的な	27%	17%
うれしい	30%	13%
難しい	8%	14%
面倒くさい	8%	13%

9 自然体験活動をたくさんした子どもの親は、様々な活動に前向き

子どもが自然体験活動をたくさん行った群ほど、『あなたのご家庭では、学校が休みの日や夏休みの過ごし方について、お子さんとよく話をする』『あなたご自身は、子ども会やPTAの活動によく参加している』などに「とても当てはまる」と答えた保護者が多く、自然体験活動を行わなかった群ほど「当てはまらない」と答えた保護者が多い。

家庭・保護者の様子	子どもが自然体験活動を	
	たくさん行った群	行わなかった群
学校が休みの日や夏休みの過ごし方について、お子さんとよく話をする	28%	10%
子ども会やPTAの活動によく参加している	28%	19%

10 自然体験活動をたくさんした子どもの親は、自ら自然体験も豊富

子どもが自然体験活動をたくさん行った群ほど、自然体験をたくさん行ってきた保護者が多く、自然体験活動を行わなかった群ほど、自然体験を行ってこなかった保護者が多い。

保護者が自然活動を	子どもが自然体験活動を	
	たくさん行った群	行わなかった群
たくさん行ってきた	45%	15%
ほとんど行ってこなかった	6%	34%

独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター実施の調査（2004.8）より引用

大人自身が「自然体験」に良いイメージを持っていればこそ、子どもにも「自分と同じ」良い経験をしてもらいたいと願う保護者が多いのは当然のことだと思います。

特に今回の調査では、それらの関係を明らかにしており、自然体験をした人ほど子育てに熱心な（理解のある）保護者であることを如実に示されています。

そう考えると、これからの子どもの育成は、親の自然体験の経験度が重要になってくるでしょう。長い目で見て、今後ライフデザインの観点から、質の高い自然体験を学校教育の中で経験してもらうことが施策として必要になってくるように思います。

学校での総合的な学習の時間や行事に見直しの声が集まってきているようですが、これらの学習が本当に子どもの心に根付いたのかがわかるのは、彼らが親の年代になってからではないかと思います。（高瀬宏樹）

ママと乳幼児のためのキャンプ

ママチルキャンプ

こんなキャンプがあります。

保護者の自然体験が鍵を握ることが、データからも明らかになっていますが、
乳幼児を抱えるお母さんに自然体験をしてもらうキャンプがあります。
「mama&children's camp project （代表　鈴木のぶ）」が行う
「ママと乳幼児のためのキャンプ」は、子育てに悩むお母さんのリフレッシュと
自分と子ども、夫など周囲の人との関係を見つめ直すことを目的にした
キャンプをしています。子育て支援の観点からも今後が注目されているキャンプです。







第1章　Ⅲ　キャンプのルールとマナー

ルールとマナーの必要性

1. キャンプの目的を達成するため
2. キャンパー同士のトラブルを避けるため
3. キャンプを指導する際のルール
4. 事故が起きた場合のルール
5. 自然環境に配慮するため

1．キャンプの目的を達成するための ルールやマナー

- 時間を守る
- 挨拶をする
- 自分のことは自分でする

- 安全に活動する
  - 服装
  - 用具の使い方
  - 活動範囲を決める
  - 事前に情報を得ておく

- 一生懸命活動する
- 他人を尊重する

それぞれのキャンプに固有のルール

2. キャンパー同士のトラブルを避けるためのルールやマナー

ソシオロジカル・インパクト
Sociological Impact
他人に与える影響

限度を超えるとトラブルの元になる

騒　音
悪　臭
衛　生
下水処理
ペットの持ち込み
など

3. キャンプを指導する際のルール

指導者の法的義務

注意義務
危険予知義務
危険回避義務

判例の理解が必要

4. 事故が起きた場合のルールやマナー

誠意を示すこと → 補償として → 傷害保険の加入
賠償責任保険の加入

和解できない場合には，さらに訴訟・裁判に・・・

民　法 刑　法

法という最終ルールに則って決着

→過去の事故事例(判例)を知っておくことが大切

5. 自然環境に配慮するためのルールやマナー

エコロジカル・インパクト(Ecological Impact)が，
環境許容量(Carrying Capacity) を越えないこと

原生自然での行動規範として
ミニマムインパクト，リーブノートレイスの実践

ただし，2次的自然（里地里山）では，
その土地のライフスタイルに従うことも必要

第1章　Ⅳ　環境教育とキャンプ

1. 環境問題
2. 環境教育とキャンプ
3. 冒険プログラムも効果的
4. 地域の文化を学ぶキャンプ

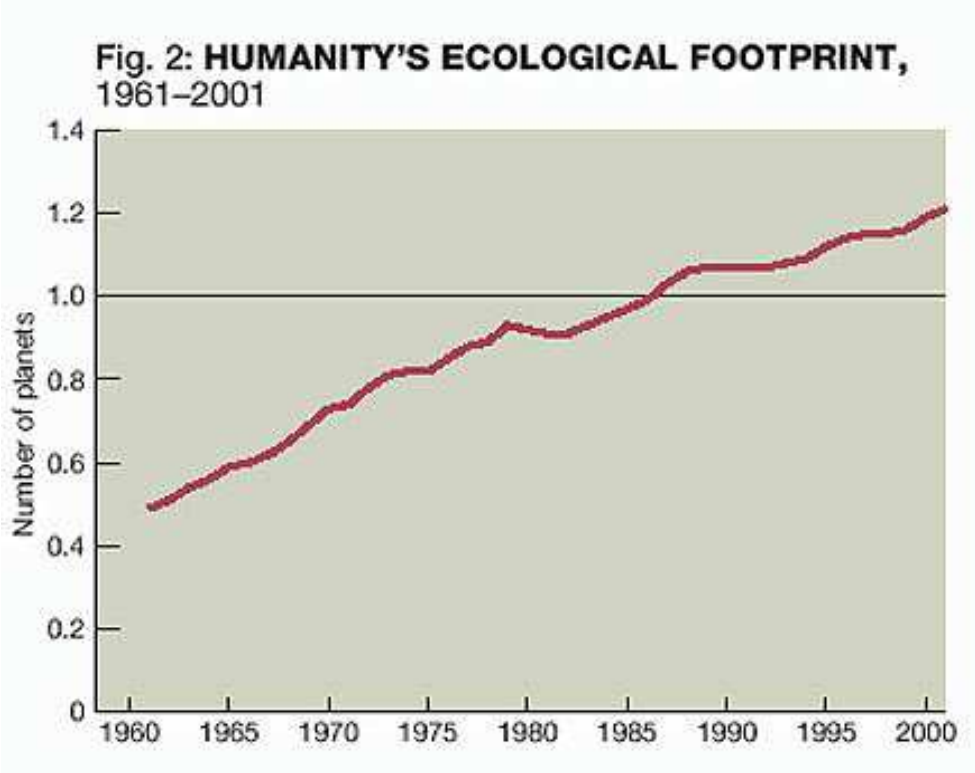
1．環境問題

環境問題はグローバル

9つの地球環境問題

- 地球温暖化
- オゾン層の破壊
- 生物多様性の減少
- 海洋環境の劣化
- 森林の減少・劣化
- 有害廃棄物の越境移動
- 酸性雨
- 土壌劣化・砂漠化
- 途上国の環境・公害

エコロジカル・フットプリント



出典：WWF　WEBサイト

持続可能な社会を目指す環境教育

地球の環境許容量は80年代後半に
すでに限界を超えている

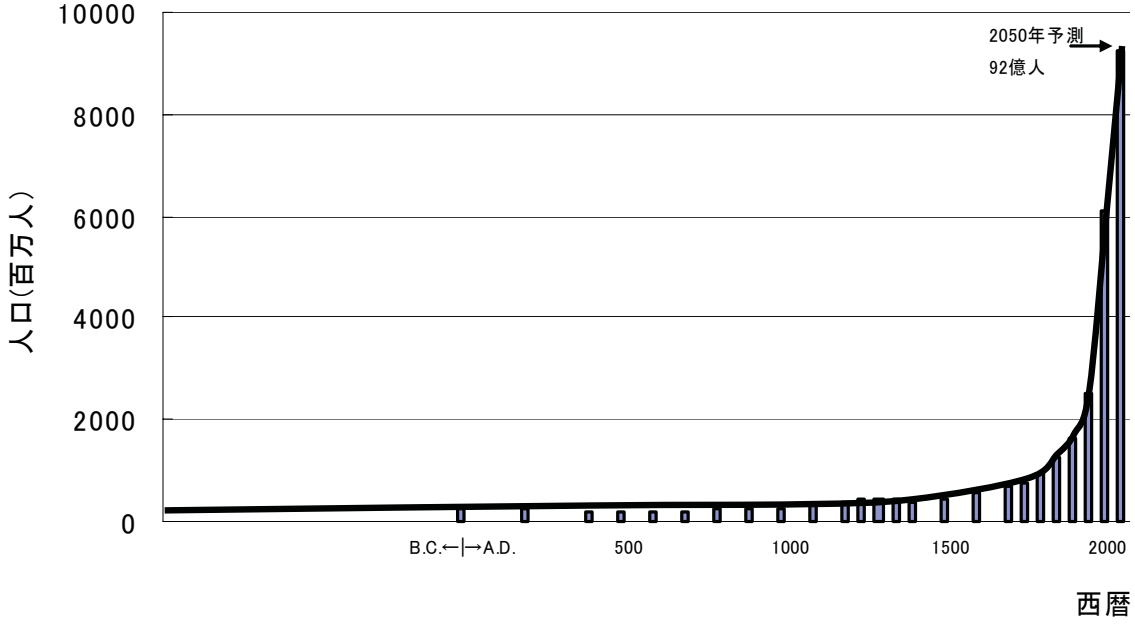
「持続可能な開発のための教育」
(Education for Sustainable Development)
「持続可能性に向けての教育」
(Education for Sustainability)

環境教育の動向

1972年	国連人間環境会議(ストックホルム会議／スウェーデン) 人間環境宣言(ストックホルム宣言)，国連環境計画の設立
1975年	国際環境教育専門者会議(ベオグラード会議／旧ユーゴスラビア) ベオグラード憲章
1977年	環境教育政府間会議(トビリシ会議／旧グルジア共和国) トビリシ宣言の12の基本原則
1992年	国連環境発展会議(リオサミット，地球サミット／ブラジル) アジェンダ21，持続可能な開発
1997年	環境と社会に関する国際会議(テサロニキ／ギリシャ) テサロニキ宣言，「環境と持続可能性のための教育」
2002年	持続可能な発展に関する世界首脳会議(ヨハネスブルクサミット／南アフリカ)

先進国と途上国，あるいは経済的な利害関係で意見の相違

世界の人口爆発



世界の人口 (アメリカ国勢調査局ホームページより資料入手)

環境問題は緊急に解決しなければならない

2. 環境教育とキャンプ

環境教育の目標(1975年ベオグラード憲章)

(1)関心　(2)知識　(3)態度　(4)技能　(5)評価能力　(6)参加

直接キャンプの目標に

個々人の問題意識，意識改革により達成

自己の成長を図る冒険プログラムも効果的

4. 地域の文化を学ぶキャンプ

平成15年度環境白書「足元からの取組の展開」

「地球規模で考え，身近なことから行動していく」

(think globally, act locally)

地域学習プログラムの実施

日常的な活動としての週末キャンプの展開